第４課　最初の教会指導者たち

【暗唱聖句】

「こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った」使徒言行録6：7

【今週のテーマ】

ペンテスコテのあと、最初に改宗した多くは、外国で生まれアラム語を話すことができないユダヤ人たちでした。今週はこの最初の教会指導者たちの姿を学びます。

【日曜日・7人の任命】

「そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである」使徒6：1

使徒言行録6章になると初代教会においてすでに問題が生じていたことがわかります。それはギリシア語を話すユダヤ人のやもめたちが日々の配給のことで軽んじられているのではないかと、ギリシア語を話すユダヤ人がヘブライ語を話すユダヤ人たちに対して苦情が出たのです。このような問題の背後にはサタンがいたとホワイト夫人は言います。初代教会の際立った特徴は、互いに交わり、助け合いながら生活していたことでした。ところがその一番素晴らしい特徴を壊し分裂を引き起こそうとサタンは働くのです。この問題が大きくなる前に、すぐに何らかの手を打つ必要がありました。そこで使徒たちが次のような提案をしました。

「そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」使徒6：2～4

使徒たちは教えと祈りに専念し、教会における実務的なことは別の人たち7人を選んで彼らに委ねるということでした。この7人の選考基準は「霊と知恵に満ちた評判の良い人」ということで、一般に教会最初の執事といわれています。しかし現代教会の執事とはかなり異なっており、実際には教会指導者という立場でした。このようにして少しずつ与えられたタラントを用いながら、一人の人にすべてが集中することなく、教会での役割が分担されていくことになりました。

「使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた」使徒6：6

執事に選ばれた者たちに使徒たちは按手して祈りました。執事の按手礼式はいまも教会で受け継がれています。

【月曜日・ステファノの働き】

「こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った」使徒6：7

執事が選ばれたことによって、ますます神の言葉が広まり、信者の数が増えていったことが書かれています。選ばれた7人の執事たちの充実な働きは、教会内の問題を解決するだけでなく、福音が広がっていく結果をもたらしていったのでした。このことから、いかに教会で様々な役員の働きが大切なのかがわかります。しかし、このような目覚ましい進展が、激しい反対を引き起こしていくことになります。ここで聖書はステファノに焦点を当てます。

「さて、ステファノは恵みと力に満ち、すばらしい不思議な業としるしを民衆の間で行っていた」使徒6：8

ステファノは神様の恵みと力に満ちている人物で、彼の働きには数々の不思議な業としるしが伴いました。しかし、その働きが目立ったからでしょうか反発が起こります。

「ところが、キレネとアレクサンドリアの出身者で、いわゆる「解放された奴隷の会堂」に属する人々、またキリキア州とアジア州出身の人々などのある者たちが立ち上がり、ステファノと議論した」使徒6：9

「解放された奴隷の会堂」とは、ローマ軍によって奴隷としてローマに連れて来られたユダヤ人たちが後に、ローマ皇帝の恩赦を受けて奴隷から自由にされ、その一部がエルサレムに戻って来て作った会堂のことです。そこに属する人々はローマの文化や習慣を知り、ギリシャ語を話すことができました。また「キリキア州とアジア州出身の人々」とは、これらの地名が当時のローマの海外植民地を示す名称であることから、そこから来た人々のことだと思われます。このような海外で生活しギリシャ語を使うユダヤ人たちに対して、やはりギリシャ語を話すステファノが福音を語ったのです。すると福音を理解していない彼らとの間で議論がまき起こります。このことは当然予測できたことでしょう。それに対しステファノは「知恵と“霊”とによって語るので」（使徒6：10）、ギリシャ語を話すユダヤ人たちは歯が立ちませんでした。そこで「民衆、長老たち、律法学者たちを扇動して、ステファノを襲って捕らえ、最高法院に引いて行」（使徒6：11）きます。訴える者たちから散々罵倒されるステファノでしたが、彼の顔はさながら天使のようだったと記録されています。

「最高法院の席に着いていた者は皆、ステファノに注目したが、その顔はさながら天使の顔のように見えた」使徒6：15。

【火曜日・最高法院の前で】

ステファノはモーセの律法や神殿の奉仕を冒涜したといって最高法院に訴えられます。そこでステファノはとても長い演説を語ります。それはアブラハムから始まってモーセまでの簡単なイスラエルの歴史なのですが、モーセの律法を冒涜すると非難している彼らこそ、長いイスラエルの歴史の中で神様との契約を守らず、聖霊に逆らい続けてきたではないかと主張したのです。その際にステファノはリーブ（契約訴訟）という神様の契約に対するイスラエルの民の不履行のゆえに神様が行った法的手段を念頭に語っています。

「聞け、主の言われることを。立って、告発せよ、山々の前で。峰々にお前の声を聞かせよ。聞け、山々よ、主の告発を。とこしえの地の基よ。主は御自分の民を告発しイスラエルと争われる」ミカ6：1，2

この告発と訳されている言葉がリーブで、民の契約不履行に対する神の告発です。このリーブという言葉はその他の箇所でも繰り返し登場します。ステファノは最高法院で被告として自分の立場を弁明するというよりも、まるで神の予言的弁護士のように、訴えるものたちを逆に神に対して忘恩と不服従を告発しているのです。また、ステファノは、初めは「わたしたちの先祖」と語っていたのが、終わりには「あなたがたの先祖」と語り、同胞との連帯ではなくイエス・キリストの側につきました。そこには恐れも後悔もありませんでした。

【水曜日・天の法廷におけるイエス】

ステファノの言葉によって祭司たちは怒りに満ちました。ステファノの言葉にはペテロのときと同様に悔い改めの招きがありませんでした。これは世界の救済がもはやアブラハムに約束されたようにイスラエルの民を仲介してなされるのではなく、イエス・キリストに従う者たちを通して、エルサレムを離れ世界中に広がっていくことを暗示していたのでした。ステファノの言葉に祭司たちは服を裂いて怒りをあらわし、群衆たちは歯ぎしりをしました。しかし、ステファノは自分の語るべきことを語ると、聖霊に満たされ天を見つめるのでした。聖書は次のようにこのときの光景を描写しています。

「ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った」使徒7：55、56

死を目の前にしたステファノの目には、天が開けイエス・キリストがはっきりと見えていました。これほど大きな励ましがあるでしょうか。イエス・キリストはお姿を現されたことで、ステファノの正しさを証明してくださいました。イエス・キリストが共におられ、聖霊に満たされることでステファノには恐れが全くありませんでした。イエス・キリストの姿はステファノ以外には見えず、彼らはステファノの言葉を聞きたくないとばかりに手で耳をふさいだのでした。そして、「ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた」（使徒7：57，58）のでした。石打ちは冒涜に対しての刑罰でしたが、きちんと裁判が行われることもなく処刑されていきました。そしてこれが最初のクリスチャンの殉教となったのでした。

【木曜日・福音の広まり】

ステファノを処刑したのを契機に、クリスチャン達に対する大迫害が始まりました。その先頭に立っていたのが後のパウロであるサウロでした。しかし、この迫害がいみじくもさらにキリスト教を世界へつげ広げる結果となっていったのです。迫害によって全土に散らされていった弟子たちが、その散らされたほうぼうで福音を述べ伝えることになったからです。その中でエルサレム教会にはびっくりするような知らせが次々に舞い込んでくるようになります。まず話題となったのは、フィリポを通してサマリア人たちが改宗しているという知らせでした。サマリア人はユダヤ人とは交際がなかったのです。そんな彼らがクリスチャンであるとはいえユダヤ人であった使徒から福音を聞き、イエス・キリストを信じるに至るというのはにわかには信じがたいことでした。そこで早速使徒ペテロとヨハネに真偽を確かめに行かせるのです。　ペテロとヨハネは改宗したサマリアの人々に按手して祈ると「彼らは聖霊を受け」（使徒8：17）、それを持って神様から受け入れられ、新しく生まれ変わったことを証明したのでした。さらに、帰国途中にあったエチオピア人の宦官もやはりフィリポによってクリスチャンとなります。こうして次々にエルサレムから始まって世界に福音が広がっていくのでした。